

2022 年 9 月 18 日（日）「キリスト者の柔和」

ガラテヤ 6:1-5

1 きょうだいたち、もし誰かが過ちに陥ったなら、霊の人であるあなたがたは、柔和な心でその人を正しなさい。あなた自身も誘惑されないように、自分に気をつけなさい。2 互いに重荷を担いなさい。そうすれば、キリストの律法を全うすることになります。3 何者でもないのに、自分を何者かであると思う人がいるなら、その人は自らを欺いているのです。4 おのおの自分の行いを吟味しなさい。そうすれば、自分だけには誇れるとしても、他人には誇れなくなるでしょう。5 おのおのが自分の荷を負うことになるのです。

【序論】

いよいよガラテヤ書の最終章に入りました。5 章までの流れを振り返りますと、福音の真理のために戦うパウロの気炎のごときスピリットが思い出されるでしょう。本書はその意味で「闘いの書」と呼ばれます。ところが、ここに来てパウロの語調に落ち着きを取り戻されていると言いますか、彼の心の奥底から滲み出る「やさしさ」が垣間見られるのです。ここに見られるパウロは成熟した信仰者であり、人間としてのバランスが取れた人物であります。真理に立つことに妥協を許さない反面、過ちを犯している人を労りつつ正道へと導いていくことを勧める。今日の箇所のキーワードは「柔和」でしょう。

【本論】

本論 1. 柔和な心

きょうだいたち、もし誰かが過ちに陥ったなら、霊の人であるあなたがたは、柔和な心でその人を正しなさい。あなた自身も誘惑されないように、自分に気をつけなさい。（6:1）

「きょうだいたち」という呼びかけには、パウロの格別な愛情が込められています。神の家族としての一体性、福音宣教の同労者、共に罪の赦しを受けている者……。いろんな思いが詰まっているでしょう。その「主にあるコミュニティ」の中で罪に陥っている人がいるとき、周りの人はどのように接するべきであるかが教えられています。

「柔和」と訳された語（πραότης／プラオテートス）は「優しさ」「親切心」「温和さ」などと捉えることができますが、パウロがここでこの言葉を用いているところに、深い配慮を読み取ることができます。ただ罪を責めるだけでは、相手の心が逆に頑なになってしまっ

たり、逆恨みされたり、教会に居られなくなってしまったり、悔い改めに至れなくなってしまったり、立ち直れなくなってしまったりと、負の連鎖が生じやすいものです。特に、周囲を抱き込んで噂が噂を呼ぶ状況を作ってしまうことがないように気をつけましょう。キリスト者はここでも主イエスの教えに基づいて行動する必要があります。

きょうだいがあなたに対して罪を犯したなら、行って二人だけのところでとがめなさい。言うことを聞き入れたら、きょうだいを得たことになる。聞き入れなければ、ほかに一人か二人、一緒に連れて行きなさい。すべてのことが、二人または三人の人の証言によって確定されるようになるためである。それでも聞き入れなければ、教会に申し出なさい。教会の言うことも聞き入れないなら、その人を異邦人が徴税人と同様に見なしなさい。(マタイ 18:15-17)

どのようなタイミングで、どういう言葉で、どんな態度で声をかけて差し上げるか、注意深く判断するものでありたい。その目的は「正す」こと、すなわち、壊れたものを修復して元の状態に戻すこと、破れた網を繕うように問題の穴を塞いでいくことです。この作業にはある程度時間がかかることも承知しておかなくてはなりません。何事も、壊れるのは一瞬ですが、立て上げるのには時間がかかるからです。

パウロがガラテヤの信徒たちに「**霊の人**」と呼びかけているのも気になるポイントです。これは「御霊に属する人」「御霊を有する人」という意味で言われていると思われますが、5章の終わりで「御霊によって歩みなさい」(5:16)と勧告されていたことの流れの上にあります。「柔和な心」とは「御霊の実」の一つであり(5:23)、隣人を自分のように愛する心です。そして、その心は、自らの弱さを知っているところから出てきます。

「**あなた自身も誘惑されないように、自分に気をつけなさい**」(6:1)。人は他人の過ちを見つけると、鬼の首を取ったかのようにその人を裁いてしまう傾向があります。しかし、パウロは言います。自分も同じことをやりかねない人間であることを常に心に銘記しておこう。人を裁くことは簡単ですが、それがブーメランのように自分に返ってくることもある。だから「**柔和な心**」で諭すことが求められているのです。

本論 2. キリストの律法

互いに重荷を担いなさい。そうすれば、キリストの律法を全うすることになります。(6:2)

本節後半に出てくる「**キリストの律法**」という表現は、少しザラつきを感じなくともありません。「キリストの福音」という言い方をすることが多く、「キリストの律法」はここにしか出てこないからです。ただ、主ご自身のことばの中にこれを示唆するものがあります。

あなたがたに新しい戒めを与える。互いに愛し合いなさい。私があなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。(ヨハネ 13:34)

「キリストの律法」とは、互いに愛し合うことである。これが答えです。愛し合うとは、許し合うこと、あるいは受け入れ合うことと言い換えてもよいでしょう。教会では血の繋がりのない者同士が「神の家族」として「兄弟」「姉妹」と呼び合っています。その関係はどこまでも愛によって結ばれ続けるのです。ヨハネも手紙の中でこのように語っています。

愛する人たち、私があなたがたに書き送るのは、新しい戒めではなく、あなたがたが初めから受けていた古い戒めです。その古い戒めとは、あなたがたがかつて聞いた言葉です。しかし、私は、あなたがたにこれを新しい戒めとしてもう一度書き送ります。それは、イエスにとっても、あなたがたにとっても真実です。闇が過ぎ去り、すでにまことの光が輝いているからです。光の中にいると言いながら、きょうだいを憎む者は、今なお闇の中にいます。きょうだいを愛する者は光の中にとどまり、その人にはつまずきがありません。しかし、きょうだいを憎む者は闇の中にいて、闇の中を歩み、自分がどこに行くのかを知りません。闇がその人の目を見えなくしたからです。（Ⅰヨハネ 2:7-11）

私たちが光の内を歩んでいるかどうかは、兄弟姉妹を愛しているかどうか、そこに「許し」があるかどうかによって明らかになる。パウロは2節冒頭で、このことを「互いの重荷を担う」という表現でも説明しています。ここで言う「重荷」とは、何らかの過ちを犯してしまっている人が抱えている苦悩を指すでしょう。そうであるならば、その重荷を一緒に負って差し上げることは、当事者にとって極めて重要な意味を持つことになります。世の常では、罪を犯した人がそれによって災いを被るなら「自業自得」と捉えられるはずです。もっと汚い言葉を使うならば「ざまあみろ」と言われるかもしれません。しかし、神の民の間ではそうであってはならない。むしろ、罪を犯した人に対し、その罪に気づくことができるように声をかけ、気づいた人が主に立ち返ることができるよう背中を支え、その人と一緒に祈り、時には誰かに対してとりなしをする。ここまでの愛が求められているのです。中には「あんな奴とは関わるな」と助言をしてくる人もいるかもしれません。そのような声との戦いもある。「愛する」ということの重みを感じます。

本論 3. 自己吟味

何者でもないのに、自分を何者かであると思う人がいるなら、その人は自らを欺いているのです。（6:3）

ここで戒められているのは「高ぶり」です。自分を「何者かである」と考えるとは、ガラテヤ書全体の文脈では、割礼を受けたことによる宗教的優越感を指すでしょう。目に見えるしを持つたことにより、割礼を受けていない人を見下すようになる。そこに何の意味もなかったとしても、心にそのような変化が生じるということはあります。

もう少し広い意味で捉えるならば、過ちを犯した人を見て、自分ならそんなことはしないということを言い始めるケースも該当してくるでしょう。すべて分かっているかのような顔で滔々と喋り続ける評論家のように、自分の問題は脇に置いて他人を裁くことに終始することもここに含まれてくるはずです。そのような心で生きている者に対し、パウロはローマ書の中で厳しく警告しています。

だから、すべて人を裁く者よ、弁解の余地はありません。あなたは他人を裁くことによって、自分自身を罪に定めています。裁くあなたも同じことをしているからです。（ローマ 2:1）

私たちは神の御前にあって自分が如何なる存在であるかというところを見失ってはなりません。他人よりもまず自分なのです。

おのこの自分の行いを吟味しなさい。そうすれば、自分だけには誇れるとしても、他人には誇れなくなるでしょう。おのこのが自分の荷を負うことになるのです。（6:4-5）

「自分だけには誇れる」という表現は少々引っ掛かります。果たして、私たちの中に誇れるような行いがあるのかどうか。一つひとつの行動の動機を探っていくとき、そこに何らかの「汚れ」が紛れ込んでいるのではないかと、不安になります。神様は私以上に私のことを知っておられる。人の目に隠されたことも、主の御前では白日の下に晒されている。言葉において罪を犯さない人はなく、自分が地上で発した言葉がすべてデータとして聞かされる日が来るとしたら、誰もが顔を覆いたくなるでしょう。

このように、私たちは自分も同じ弱さを持っている者であることを自覚しながら、もし周りで罪を犯している人がいるならば、同じ目線で忠告して差し上げることが勧められているのです。そのような、優しい言葉こそ、人の心を動かすはずです。

【結論】

改めて、今日の箇所は「柔和」というキーワードが中心に置かれていたと思います。柔和とは「御霊の実」の一つであり、それを心の中心に置いて生きるとき、私たちは信仰において成熟した者となることができるでしょう。真実を見極める目を養うことは重要でありながら、それを伝えるときに私たちの品性が問われるのです。パウロはローマ 5:4 で「練られた品性」が養われることを読者に勧めています。この言葉は、口語訳では「練達」、聖書協会共同訳では「品格」と訳されていますが、新改訳の「練られた品性」という訳も捨てがたい。これは「柔和」と深く関わっているものであるということを心に留めたいと思います。

【祈り】

柔和なる王、イエス・キリストの父なる神様。弟子たちは皆、主イエスのように生きたいと願います。自分の弱さ、愚かさを知る私たちには、へりくだりつつ隣人に寄り添う道があります。人を裁くことなく、心からの思いやりをもって、その人にとって真に必要な言葉をかけて差し上げることができるよう、助けてください。教会がそのような良い循環をもたらしていく群であることができますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
忍耐と思いやりとをもって、イスラエルの民を約束の地へと導き給うた、父なる神の愛、
無理解なる弟子たちを愛し、柔和な心をもって教え給うた、主イエス・キリストの恵み、
練られた品性をもって隣人との関係を築かせ給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。